『オマージュ』

監督・脚本：シン・スウォン

出演：イ・ジョンウン、クォン・ヘヒョ、タン・ジュンサン、
イ・ジュシル、キム・ホジョン ほか

2021年／韓国／109分

予　告

DVD 発売中
¥3,800（税抜）
販売元：アルバトロス

社会を旅する
シネマ

きっと もっと 近くなる
きっと もっと 知りたくなる

映画業界は、「機会均等」になったか？

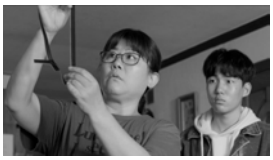
アーヤ藍

49歳のジワンは映画監督として10年の経歴をもつものの、ヒット作はなく新作の客入りもまばら。一緒にやってきた女性プロデューサーも、資金繰りの目処が立たずあきらめムード。そんな中ジワンは、今は亡き女性監督ホンが1960年代に撮った映画『女判事』の欠落した音声を修復する仕事を請け負うことに。しかし作業を進める中で、明らかに話の展開がおかしい部分があり、フィルムの一部が失われていることに気づく。ジワンはホン監督の家族や関係者を訪ねてまわりながら、欠けたフィルムの真相を探っていく。

その旅路の中で見えてくるのが、映画業界における女性たちの苦闘だ。ホン監督と同世代の数少ない存命者であり、かつて映像編集者だった女性オッキはホン監督と個人的にも仲良しだったにもかかわらず、ホン監督に娘がいたことを知らなかった。子どもがいることが業界に知れたら仕事がこなくなると恐れて隠していたのだろう。オッキも昔をふり返り「女が編集室に入ると縁起が悪い」と言われ塩をまかれた経験を語る。そんなオッキに「今は改善された？」と聞かれ、ジワンは「当時よりは」と答えるが、実はジワンも「映画より家事に専念しろ」と映画会社の代表に言われた経験がある。そして『女判事』のフィルムの欠損も革新的な女性像に対する検閲ゆえだと判明する……。

本作はやさしく軽やかさもある劇映画だが、実在の女性監督たちとその作品に着想を得て描かれており、映画業界における女性たちの苦しさは決してフィクションではない。そして韓国だけで起きている問題でもない。（一社）Japanese Film Project の調査によれば、2022年に劇場公開された邦画作品のうち女性が監督を務めた作品はたった11％。プロデューサー、脚本、撮影などの他職種でも女性は20％以下だ。映画をはじめ芸術にかかわる領域が難しいと思うのは「才能があるかどうか、作品が良いかどうか次第だ」と言われてしまうと、ジェンダーギャップが正当化されてしまいやすいことではないかと思う。本作においてもジワンの作品を息子が「つまらない」と言っており、彼女が売れない理由は彼女自身の問題にも思える。

だが一方で、本作で描かれるジワンの日常を見ているとモヤモヤしてくる。家事を上から目線で押しつけてくる夫。息子は「母さんも父さんにパラサイトしているから」と就職しないと言い出す。義母からは「忙しくても夫と子どもは大事にしなさい」とプレッシャーをかけられる。更年期の症状も容赦なく襲ってくる……。ジワンにたとえ大きな仕事のチャンスがめぐってきたとして、そこに心身をかける余裕はあるだろうか。そもそもこれまで経験をつむ機会がめぐってこなかったのは彼女自身の問題なのか。#MeToo 運動も映画業界から端を発したものだったが、映画業界での「機会均等」にはまだまだ疑問を抱かずにはいられない。



©2021 JUNE FILM All Rights Reserved.

あーやあい：映画探検家。慶應大学卒。在学中に訪れたシリアが帰国直後に内戦状態になったことが契機で、社会問題にかかわる映画の配給宣伝を行うユナイテッドピープル（株）に入社。取締役副社長も務める。現在は独立して映画イベントの企画運営や記事執筆等を行う。編著書に『世界を配給する人びと』（春眠舎）。